

越来グスクと領主たちの伝説

『中山世譜』には、尚泰久が越来の領主であったときに「世理休」という名前の側室を置いたと書かれています。

越来集落の言い伝えでは、越来グスクに住んでいた頃の尚泰久に見初められた宮里集落の娘に子ができ、越来の川畑家でその子を生き育てたといわれています。川畑家には出産のお祝いとして白椿とみかんの木が贈られ、戦前まで残っていましたが、みかんは戦災で失われ、白椿も1997年に枯れてしまいました。しかし挿し木で殖やしていた白椿を植え戻すことができ、今も時期になると川畑家の白椿は花を咲かせています。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

宮里の石城家には戦前、鬼大城が着たという着物や、指を鍛えるため石投げ遊びに使っていた石があったそうです。ある年の八月十五夜、鬼大城が石城家を訪れると、村の青年たちが棒術の稽古をしていました。鬼大城はいたずら心を起こし、彼らから六尺棒を借りると地面深く押し込んでそのまま越来グスクに引き揚げてしまいました。ところが城で奥さんに叱られた鬼大城は、すぐ宮里に戻ってきて青年たちに詫言、二、三名がかりでも抜けなかった棒を指でつまみ、すっと引き抜いて返してくれたそうです。



川畑家の白椿

越来グスク年表

- 2019年 ● 国名勝「アマミクヌムイ」追加指定
 - 1980年 ● 城前公園整備、越来グスクの拝所改築
 - 1955年 ● 越来グスクの拝所再建
 - 1945年 ● 沖縄戦。越来グスク破壊
- ~~~~~
- 1700年代～ 「越来城殿」として拜まれている
 - 1613年 ● 『おもろさうし』第二「中城、越来のおもろ」成立
 - 1526年頃 ● 各地のグスクから控司引き揚げ
 - 1470年 ● 尚宣威が越来王子に
 - 1458年頃 ● 鬼大城が越来間切の領主に
 - 1435年 ● 尚泰久が越来王子に

1100年代～1400年代
越来グスクがさかんに使われた時期

……神話の時代……

アマミクが越来グスクをつくった……?

国の名勝アマミクヌムイ

琉球国が1613年に編纂した『おもろさうし』第二の巻には越来グスクを讃えた歌がいくつかありますが、そのひとつに、琉球の島々を作った神の名前が登場します。

一 ごゑく こてるわに
ゑのち ともおそいや
あまみきよが たくだるぐすく

又 みもの こてるわに

おおまかな意味は「越来グスクの聖域に力ある神女が（祭祀を執り行なう）、アマミキヨが作ったグスクで」というもの。

アマミキヨはアマミクともいい、世の始まりに天から降り立ち、沖縄島のあちこちに聖地を造ったと伝えられています。

「アマミクヌムイ」は、この神話にもとづき、琉球国がまとめた四つの本『おもろさうし』『中山世鑑』『琉球国由来記』『聞得大君御殿並御城御規式之御次第』でアマミクが関わったと記される聖地を沖縄県が候補に選び、国が名勝として指定したものです。なお、「ムイ」は岩山など高く盛り上がった場所を指す琉球語です。琉球の島々ではこうしたムイはよく見られる地形であり、ムイが聖地とされることもよく見られます。「アマミクヌムイ（アマミクのムイ）」はこのような琉球独自の自然と信仰のありかたを沖縄のことばであらわした名勝名として名づけられたものです。

名勝とは

国指定の名勝とは、独自の自然や風土が残る場所、神話や伝説の舞台、物語や歌に描かれて人びとに親しまれた場所など、その土地らしさ、日本らしさを伝える風景がある場所を、国が保護すべき文化財として選んだものです。

名勝は、その景色を眺める人が、自然や歴史、伝説や物語、信仰や記憶といったさまざまな情報を重ねたときに、その土地にしかない大切な風景として見出すものです。地域に暮らす人びとにとっては、原風景として心に抱く風景とも言えます。

現在の越来グスクは、グスクとしてのすがたを見ることはむずかしくなっていますが、ここが大きなグスクであった史実や、さまざまな言い伝えや、今も祭祀が続けられる信仰心のなかに、心の風景としての越来グスクが残っているといえます。



旧暦8月15日に行なわれるウスデーク



越来グスクの拝所での祈願

沖縄市立郷土博物館 2020年3月発行
〒904-0031 沖縄県沖縄市上地2-19-6 文化センター3階
電話 098-932-6882



博物館Website

越来グスクと 周辺文化財マップ



一 ごゑく こてるわに
ゑのち ともおそいや
あまみきよが たくだるぐすく
又 みもの こてるわに

2019年、越来グスクは国の名勝「アマミクヌムイ」に追加指定されました。

古歌謡集『おもろさうし』に、「あまみきよが たくだるぐすく」、すなわち琉球創生の神アマミクが作ったグスクだと越来グスクを讃える歌があることから、アマミクにゆかりのある琉球独自の聖地の一つとして指定されたものです。

越来グスクは沖縄戦の直後に丘陵ごと切り崩され、その後に都市開発も進んだこともあって、現在は住宅地や公園となっています。そのため、現在は高くそびえるグスクの威容を見ることはできません。

しかし、地元越来の人々の手で再建された越来グスクの拝所では、今も折々に欠かさず祈りが捧げられています。越来グスクとその周辺の街並みを歩いてみれば、今も、グスクがそびえていた頃の伝説や風景をたどることができます。

このマップでは、越来グスクを中心に越来グスクや越来地域の歴史を感じられる場所をご紹介します。

越来グスクはこんな場所

越来グスクは沖縄島中部、沖縄市城前町にあるグスクです。標高70～80メートルほどの丘に築かれ、南に比謝川の流を見下ろすこのグスクは、戦前は石垣や拝所が残っており、頂上からは泡瀬の海を望むことができました。しかし1945年に土台の丘ごと切り崩され、どんな作りのグスクだったか詳しいことはほとんどわかっていません。

越来グスクに関する最古の記録としては「琉球国之図」（1453年作成）に「五欲城」と記されているものがあります。または第一尚氏第六代の王、尚泰久が作らせた「安国寺銅鐘」（1457年記録）の銘に「魏古城に寄進した」ことが記されていたと記録があり、越来グスクを指すと考えられています。

尚泰久は王子時代に越来を領地としていました。のちには武勇に優れた武将、鬼大城ごと大城賢雄も越来を領地に与えられています。また、第二尚氏第二代の王、尚宣威も王子時代に越来を領地としていました。彼らは越来グスクを居城としていたと考えられています。

近世の越来グスクは、『琉球国由来記』の記述などからすると拝所がおかれ、越来集落や周辺の集落によって祭祀が続けられていたようです。現在も、越来共有会によって旧暦1月のタチウガンや8月の十五夜ウガン、12月のウガンブトウチといった祈願行事が行なわれています。

発掘！越来グスク

越来グスクでは、1985年、2010年、2011年の3回、発掘調査が行なわれています。

1985年の調査では、掘立柱建物跡や、柱穴などが見つかったほか、刀の鏢や鎧の金具、刀子などが出土しています。

2010年と2011年の発掘調査では、炉跡や4本柱の建物の跡、円弧状の遺構が見つかりました。埋葬されたと思われる幼児人骨7体、成人人骨3体も見つかっています。遺物としては、中国産の陶磁器や、鉄製品、青銅鏡片や、穴がけられていない石灰岩製の勾玉、ガラス製の玉などが出土しています。青銅鏡片は8点あり、分析の結果、日本の平安時代に作成されたものや、中国の唐の時代の作と思われるものが確認されました。鏡は作られてからそれほど経っていない時期に琉球に持ち込まれたと推測されています。遠い地で作られた鏡がいつ、どのようにして越来グスクまで持ち込まれたのか、想像をかきたてられる出土品です。



石灰岩の勾玉

青銅鏡の破片

中国産の磁器の破片

建物跡と円弧状の遺構